萩原朔太郎全集

第十三巻

萩原朔太郎全集

第十三巻

筑摩書房

萩原朔太郎全集　第十三卷

昭和五十二年二月二十五日
初版發行

著　者　萩原朔太郎
發行者　井上達三
發行所　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二―八
電話(二九一)七六五一(代表)
振替口座　東京六―四一二三

本文整版印刷＝株式會社精興社
寫眞整版印刷＝株式會社東京美術印刷社
製本＝牧製本印刷株式會社

(分類) 0395 (製品) 73513 (出版社) 4604

凡例

一、本全集は、萩原朔太郎の既發表、未發表を問わず、詩・短歌・俳句・アフォリズム・詩論・文明論・書評・序跋・書簡・各種ノート等にわたって、全業績を收錄することを目途とした。

一、本卷（第十三卷）は書簡を現時點において可能な限り蒐集、收錄した。

一、書簡の配列は、原則として郵便局消印の日付順とした。同日中に數通投函されている場合も、內容を檢討類推して配列した。

一、日付不分明の場合は、內容及び前後關係より判斷して配列し、消印項目の箇所に（推定）と記入した。（推定）は主として次のごとき場合である。

1　消印判讀不可能なもの。

2　雜誌その他の印刷物から轉載したもので、消印日付が記錄されていないもの。

3　郵便局を經ず、相手に渡されたもの。

一、日付の下部に「消印局名」「はがき・封書」等の種別を明記した。宛先、發信の住所氏名等は原文尊重の立場から一切改變せず、句讀點もそのままとした。發信住所・氏名が印刷等の場合は、その旨を〔　〕で記入した。

一、遺稿として殘され、發信不明の二通については卷末に收錄した。

一、本文は、書簡原物またはその複寫を以てテキストとした。文面は殘っていても紛失その他の事情で原物入手が不可能で、書寫のみ存する場合は「照合不能」と記入した。

一、見出し氏名は、同一人の本名及び筆名の兩方が宛名として書かれている場合、もっとも通りやすい氏名に統一した。

例　北原隆吉→北原白秋、平井太郎→江戸川亂步、宵島俊吉→勝承夫、等

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一、本文は正字に統一した。略字、俗字、異體字、嘘字等もこれに準じた。變體假名も改めた。
ただし、通用されていた人名はそのままとした。
例　凉―入澤凉月、恒―福鎌恒子、等

一、著者獨得の用字・用語、造語、送り假名、踊り字、外國人名、等は原文のままとした。
1　著者獨得の用字・用語
例　對手、慘酷、深酷、笑談、慘毒、心胸、薄遇、自識、敬嘆、鋭感、家根、陷入る、等
2　著者の造語とみられる語彙
例　寂淋、物談、邪解、酸廢、全躍、懺恥、共流、拔評、廢跡、透純、青春線、徹入、誤點、謝拒、等
3　外國人名の表記
例　ド氏、ト氏、ボドレエル、等

一、促音、拗音は特に字を小さくしなかった。

一、誤字・誤記、假名遣の誤は、すべて原文のままとした。このような場合、當該文字に「ママ」とルビを振るのが通例であるが、本卷においては「ママ」に代えて黑點「・」を付して讀者の注意を喚起した。
1　誤字・誤記
例　御影、待史、親籍、速刻、相南、切吻、神士、紳經、乍禪、翠日、御惑述、悉細、丁載、捘侈、腦む、唄歌、矛循、價致、生從、問題となる居る、ムニフ、ボトレエル、トルストヒ、等
2　假名遣の誤り
例　そうして、だろう、散歩している、するように、見やうと、かういう、耐えず、等

一、脱字は當該箇所に〔　〕で補った。

例　注意人物にされる〔の〕です、定められ〔て〕居ます、露〔西〕亞人、見え〔なく〕なって、等

一、文字が讀みとり困難、又は讀みとり不可能な場合は、不明の字數分だけ空白にして、その横に黒點を付した。

例　・曜の朝、貴下と　・・したる、家の方で　・・さんと、等

一、改行はほとんど一字下りになっていないが、本卷ではすべて一字下りに統一した。

一、文末の結びの言葉、宛名、署名等は位置を統一した。

一、句讀點は曖昧なものが非常に多いが、明らかに句點と讀み取れる以外、すべて讀點とした。また句讀點を缺く場合は原文のままとした。

一、各書簡に內容の理解及び年譜事項、補足說明等で必要と思われる注を付した。人物についての注記は、名宛人の場合は初出書簡に、それ以外の場合は原則として初出箇所に付した。

追求調査しながらも現時點で不明のものは「未詳」とした。

一、未發信、及び斷簡を卷末に補遺として收錄した。

目次

明治　明治三十八年—明治四十五年

明治三十八年（一九〇五年）……五
明治四十年（一九〇七年）……六
明治四十一年（一九〇八年）……六
明治四十二年（一九〇九年）……九
明治四十三年（一九一〇年）……一三
明治四十四年（一九一一年）……一四
明治四十五年（一九一二年）……一〇

大正　大正二年—大正十五年

大正二年（一九一三年）……四七
大正三年（一九一四年）……四八
大正四年（一九一五年）……七三
大正五年（一九一六年）……一〇五
大正六年（一九一七年）……一五六
大正七年（一九一八年）……二〇三
大正八年（一九一九年）……二〇八
大正九年（一九二〇年）……二一八
大正十年（一九二一年）……二三〇
大正十一年（一九二二年）……二三八
大正十二年（一九二三年）……二四二
大正十三年（一九二四年）……二四九

大正十四年（一九二五年）……二五二
大正十五年（一九二六年）……二五九

昭和　昭和二年—昭和十七年

昭和二年（一九二七年）……二六七
昭和三年（一九二八年）……二六八
昭和四年（一九二九年）……二六九
昭和五年（一九三〇年）……二九九
昭和六年（一九三一年）……三二六
昭和七年（一九三二年）……三三八
昭和八年（一九三三年）……三四一
昭和九年（一九三四年）……三四八
昭和十年（一九三五年）……三六四
昭和十一年（一九三六年）……三七九
昭和十二年（一九三七年）……三九八
昭和十三年（一九三八年）……四一三
昭和十四年（一九三九年）……四二三
昭和十五年（一九四〇年）……四三八
昭和十六年（一九四一年）……四五二
昭和十七年（一九四二年）……四六一

補遺……四六七
解説……四七一
人名索引

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第十三卷　書簡

明治

明治三十八年—明治四十五年

明治三十八年（二十歳）

一　入澤涼月宛　一月（推定）　はがき　照合不能

涼月君足下

「白虹」二號難有拜見仕り候、開戰以來雜誌の倒るゝもの頗る多く、雜誌事業の愈よ困難なる今日かくの如き活氣ある大文學雜誌を獨力にて發行したまふ君も亦快男子なる哉。

小生はかゝる情新の美術雜誌を永く日本の文學界に止めて、兄の手腕をあくまで奮はれんことを切望に堪えず候

（前橋萩原美棹）

＊入澤涼月　明治十七年十二月―昭和二十六年三月。本名恕次。詞華集『青蘭集』（明治三十九年九月刊）を編纂。朔太郎は新體詩「君が家」寄稿。

＊『白虹』（明治三十八年二月號）より轉載。この雜誌は岡山市居住の涼月が中心になって刊行された。朔太郎は同誌明治三十七年十一月創刊號、同三十八年四月號、六月號に短歌、詩を寄稿した。

＊萩原美棹　當時、朔太郎が主として使用したペンネーム。

＊開戰以來　日露戰爭（明治三十七年二月―三十八年九月）のこと。

二　萩原榮次宛

八月十八日　相摸大磯　はがき
金澤市上胡桃町十一番地　萩原榮次樣　大磯茶屋町、鍵屋方　萩原朔太郎

祖父樣祖母樣省三君の一行と共に大磯の海水浴にあり雨多くして水浴の機會少なきを限む。

尙この地に三日を費やすべき豫定也。

昨雨大暴風雨あり激浪の高きもの一丈に達し轟々の音夜もすがら止まず

此の圖、海濱のスケッチ御笑覽下されたし

こゝにきて未だ一の句なく歌なし。

八月十八日したゝむ

＊自筆水彩繪はがき

＊萩原榮次　明治十一年十二月―昭和十一年九月。大阪生れ。朔太郎の從兄。醫師。朔太郎の少年時代、密藏の醫療を手傳っており、精神的に影響を與えたと思われる。朔太郎の文學の理解者であり、『月に吠える』初版獻辭は「從兄萩原榮次氏に捧ぐ」となっている。

＊祖父樣祖母樣　朔太郎の母方の祖父八木始と祖母さと。八木始は前橋松平藩出身。郡長、群馬縣師範學校副校長その他の職についた後、主家松平伯爵家の相談役として麴町の松平家邸内に住む。朔太郎は八木家の祖父母にたいそう可愛いがられ、しばしば同家に宿泊した。

＊省三君　八木省三。母方の從弟。

明治四十年（二十二歳）

三　萩原けい宛

十一月十一日　熊本坪井　はがき
群馬縣前橋市北曲輪町六九　萩原けい
様　第五高等學校寄宿舎北ノ十二、
萩原朔太郎

御手紙及び爲替金三十圓正に落手仕り候、
色々こまゞゝと御注意下され難有く御心慮確に心得申し候間乍禪御安心下され度候。尚前便申しあげ候荷物の中に羽織の紐を申しあぐるを忘れ候間何卒右も御ついでに御送惠願上候、外套は多分河内に預け行きたるものと存じ候間榮次君に問ひ合せの手紙を出し申し候、天長節の翌日に寫したる制服制帽の寫眞御送付致し候間御笑覽下され度候、同寫眞にて着用せる外套は三木氏よりの借り物に御座候ゆき子によろしく御傳言願上候、父上には後便出し申すべく候、　早々、

綿も御送り下されたし

*寫眞はがき（熊本第五高等學校正門）。
*萩原けい　慶應三年四月―昭和二十六年十二月。前橋市の八木家に生れる。朔太郎の母。本名ケイ。
*河内　萩原家本籍、大阪府中河内郡三木本村（現八尾市）。
*三木氏　「第五高等學校卒業者名簿」によると「第一部英語法科　愛媛縣平民　三木五郎」の名がある。
*ゆき子　津久井幸子（書簡一三參照）。

明治四十一年（二十三歳）

四　萩原榮次宛

三、四月頃（年月推定）　封書　照合不能

前略
御玉章拜哺、只御懷かしさに返し拜哺仕り候、
夏の休暇には第一に御面會いたしてつもる話をいたしたくそれのみ樂しみに致し居り候、
菫や紫雲草の咲き亂れた野路を逍遙して空想にふけるのが此頃唯一の樂しみでございます、
近頃小生は詩想日々にすさみ往々の狂熱影をとゞめず詩といふものより遠ざかり行くことの悲しくこれも春愁のとつに御座候、
短歌といふもの久しく作らねば何やらよそのことの樣に思はれ候、さしも好きなりし晶子の歌も近頃の傾向は に生の感興を くことなく無論他の作家の作は哺するに足らざる駄作のみにて歌といふ歌に接せざること久しくなり候ため自然緣うとくなり忘れはつる樣になり申し候、
小說も多くはよまずたゞ中央公論の附錄だけはいつも面白くよみ申し候、ホトヽギスはいつも愛讀いたし居り候、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com